渡嘉敷

太平洋戦争の足跡
***1945* 年の慶良間諸島への米軍上陸に関連した *6* つの場所を時系列でたどる旅**

ルート: 北山– 渡嘉敷集落
距離: N/A
所要時間: 2 時間
難易度: N/A

概要
第二次世界大戦中、アメリカ軍は一地域ずつ攻め落とす飛び石作戦により、日本の本土上陸に向けて進軍していました。アメリカ軍は、1945 年 2 月 19 日に硫黄島に、4 月 1 日には沖縄本島に上陸しました。その間、3 月 26 日に座間味の島々に上陸、続いて 3 月 27 日に渡嘉敷に上陸し、慶良間諸島を占領しました。

この行程は、渡嘉敷の北部にある多くの主要な戦争に関連する場所を時系列に扱っています。出発地点の北山まで歩くこともできますが、道が悪いのでスクーターか車で行く人が多いです。目的地はこの北山山頂にある国立沖縄青少年交流の家に三か所、渡嘉敷に戻る道の途中に一か所、そして渡嘉敷集落に二か所あります。

行程
出発地点に行くには
北山山頂の国立沖縄青少年交流の家に行くには、渡嘉敷から南に向かう村道青年の家線を通ります。受付に立ち寄り、到着を報告しましょう。北山と渡嘉敷集落の概観を得るために、渡嘉敷島の地図を見ましょう。

1. 侵攻開始
国立沖縄青少年交流の家に入ったら、**北山展望台**に向かってください。展望台からは、渡嘉敷の西にある座間味村の島々（座間味、安室、阿嘉、慶留間、外地、渡名喜、粟国、久米）を収めるパノラマビューが望めます。アメリカ軍は 3 月 23 日に座間味の島々で空爆と艦砲射撃を開始し、3 月 26 日に座間味島に上陸しました。

2. 集団自決跡地
アメリカ軍は 3 月 27 日、渡嘉敷島に侵攻し、島の西岸のとかしくから上陸しました。ジャングルに避難していた島の住民の多くは、敵の手に落ちるより、自ら命を絶つことを選択しました。アメリカ軍が上陸した翌日 3 月 28 日に数百人の民間人が亡くなった**集団自決の跡地のひとつ**を訪れることができます。古い米軍倉庫の横にある門を通り、慰霊碑を回り込んでジャングルに続く階段を下りていくと、フェンスで囲まれた広場に到着します。ここが、集団自決跡地です。帰る際には立ち止まって慰霊碑の後ろにあるパネルを読んでください。このパネルには、当時のアメリカの新聞記事が転載されており、意図せずに引き起こした集団自決を見た侵略者が感じた恐怖が詳述されています。

3. 沖縄戦
今度は**東展望台**に向かいましょう。ここからは黒島（北東）、前島（目の前）、慶伊瀬島（前島の西にある三つの小島）、そして沖縄本島が見えます。慶良間諸島における組織的な抵抗は 3 月 29 日までに崩壊

し、アメリカ軍は迅速に侵攻を進めました。3 月 31 日に前島と神山島（慶伊瀬島の一島）を陥落させ、4 月 1 日に沖縄本島に上陸しました。

沖縄戦は、6 月 22 日まで 82 日間続きました（小規模の衝突は 9 月まで続きました）。このおびただしい量の血が流れた戦闘では、約 12,500 人のアメリカ兵、94,000 人の日本兵、そして正確な人数は不明であるものの非常に多くの沖縄の民間人（一部の推定ではもともと 30 万人強いた人口の半分）が命を失いました。

4. 慶良間諸島の戦没者慰霊碑

次の場所に行くには、車で渡嘉敷につづく道の 3 分の 2 ほどを戻る必要があります。ヘリポートを過ぎたところに、戦没者慰霊碑である**白玉之塔**の標識があります。この碑はもともと、アメリカ軍上陸のちょうど 6 年後の 1951 年 3 月 28 日に建立され、島の住民、日本兵、軍属、防衛隊員を祀っています。元は北山の実際の集団自決跡地に立っていましたが、北山がアメリカ軍に軍用地として収用されたので、1962 年に現在の場所に移設されました。

5. 榴散弾が撃ち込まれた石灰岩の石垣

次の目的地は、渡嘉敷村の渡嘉敷神社からほど近い**根元家**の巨大な石灰岩の石垣です。かつてここには裕福は船頭の見事な家が建っていましたが、家屋は戦争で破壊され、石垣を残すのみとなっています。石垣に残る榴散弾の跡を探してみましょう。大きなくぼみは戦闘機に搭載された機関銃、小さなくぼみは手で持った武器によるものです。石垣の東隅の外壁は色が異なりますが、これは第二次世界大戦で破壊された部分を再建したためです。

6. 伊江島民収容所

渡嘉敷村にある最後の目的地は、**伊江島民収容所の記念碑**です。アメリカ軍が伊江島（70km 北）に日本本土侵攻のための基地を建設することを決めたとき、約 1,700 人の伊江村民がここ渡嘉敷に移されました。彼らの一部は米軍の砲撃を免れた数少ない家屋や離れ家に入居できましたが、多くの人はテントに住まなければなりませんでした。1945 年 8 月 15 日に日本が降伏した後、丘に避難していた地元の人々が隠れ場所から戻ってくると、渡嘉敷の住民と抑留された伊江島民は、身を寄せ合って暮らすことを余儀なくされました。この状況は、アメリカ軍が伊江の人々が島の自宅に戻ることを許可するまで、約 2 年間続きました。

その他の渡嘉敷の戦争に関連する場所

特攻艇秘匿壕（渡嘉敷ビーチ）
戦跡碑（村道阿波連線）
赤松隊本部壕（国立沖縄青少年交流の家）